

第44回

木村伊兵衛写真賞 発表!



[受賞作品]

岩根 愛「KIPUKA / FUKUSHIMA ONDO」

作家インタビュー&選考委員評

[昨年度受賞作家・最新作]

小松浩子「第三者遠隔認証」
藤岡亜弥「カントリーエコーズ」

第44回

木村伊兵衛写真賞受賞
岩根 愛さんインタビュー

第44回木村伊兵衛写真賞の受賞者は、岩根愛さんに決まりました。受賞作「KIPUKA」および「FUKUSHIMA ONDO」はどんな思いを込めて作ったのか。どのようなきっかけで写真を始め、どのような思いで被写体に向き合ってきたのか。インタビューで作品への思いを語ってもらいました。

文=タカザワケンジ(写真評論家) 撮影=掛 祥葉子(写真部)

初めてハワイに行ったとき
日本のお墓に衝撃を受けた

— 受賞おめでとうございます。まずこれまでの歩みからうかがいたいのですが、写真家になろうと思ったのはいつごろですか。

岩根 愛(以下、岩根) アメリカの高校に行っているときですね。図書室に『World Photography』っていう本があって、内藤正敏さんの「婆バクハツ!」が載っていたんです。そのページがすごく好きで、写真家という職業をはっきり意識しました。最近気づいたんですが、「KIPUKA」のライティングが影響を受けていると思って。(笑)

— たしかに踊っている人にストロボ直当てしてる写真なんかそうですね(笑)。高校を卒業されて、日本に帰ってからアシスタントを経て写真家として独立されたんですね。

岩根 その頃は、大人になるって自活することだと思っていました。早く仕事ができるようになりたかった。最初の頃は、仕事の大半がミュージシャンのCDジャケットやライブの写真だったんですけど、音楽の現場で写真を撮ることがすごく好きでした。やりたいこととやっていることが一緒に満足してました。いま考えると、盆踊りも音楽で、やっていることは同じなんですよ。(笑)

— たしかに!(笑)

岩根 変わってないんですよ。

— つながっていますね。仕事とは別に作品づくりに取り組むようになったのはいつごろからですか。

岩根 ハワイに通うようになった2006年からですね。写真集の1枚目が初めてハワイに行った年に撮った写真です。よく見るとお墓が写ってるんですけど、このお墓に出合って衝撃を受けました。昔、日系人が住んでいた町がここにあったんです。それからハワイの移民の人たちを追いかけるようになりました。それとボンダンスとの出会いですね。

— 『KIPUKA』はハワイの日系人と福島の人々が「ボンダンス/盆踊り」でつながっている作品だといいますが、ハワイが先だったんですね。

岩根 最初は日系2世の人にインタビューしてポートレートを撮らせてもらいました。以前本誌にも載せてもらったんですけど。でも、BRIAN Y. SATOという人がずっと2世の人たちを撮っていることを知って、フットワークでも量でも、撮る理由でも、きっとこの人になわれないと思ったんです。BRIANは日本でも展示して伊奈信男賞(12年度)をとっています。いまではいい友人なんですけど。

— 『KIPUKA』はいくつかの要素があって、岩根さんが試行錯誤を繰り返しながら撮影してきたであろうことがうかがえます。

岩根 一、二度行っただけではとらえきれないものがたくさんあって、ハワイに通うようになりました。

いわね・あい

東京都生まれ。1991年単身渡米、ベトロリアハイスクールに留学。オフグリッド、自給自足の暮らしの中で学ぶ。帰国後、アシスタントを経て96年に独立。雑誌媒体、音楽関連等の仕事をしながら、世界の特殊なコミュニティでの取材に取り組む。2006年以降、ハワイにおける日系文化に注視し、13年から福島県三春町にも拠点を構え、移民を通じたハワイと福島の間連をテーマに制作を続ける。18年、初の作品集『KIPUKA』(青幻舎)を上梓。

ロケ仕事をつくるとか、連載をするとかしてなるべくハワイに行くようにしました。

——試行錯誤の一つにサトウキビ畑に古い写真をプロジェクションした写真がありますね。

岩根 盆唄の「フクシマオンド」をハワイに伝えた4家族の記念写真を、彼らが住んでいたサトウキビ畑に投影して写した写真なんです。

——岩根さんのアイデアで「つくった」写真ですよ。事実の記録ではなく。

岩根 サーカット(Cirkut)というカメラが回転するパノラマカメラを使い始めてから写真に対する考え方に变化があって、こういうこともやってみようと思うようになりました。

——そのパノラマカメラはどこで知ったんですか。

岩根 お寺や日系人のおうちに行くとき必ずものすごく横長のパノラマ写真が丸めであったりするんですよ。当時の日系の写真館には必ずサーカットがあり、お葬式とか、お寺の会合など、人が集まるときに、集合写真を撮っていたそうなんです。

> 何百年も連なってきた 音やエネルギーを写したい

——『KIPUKA』はパノラマ写真で現在と過去をつないでいる。歴史的な奥行きがあります。また、空間的にはハワイと福島という離れた二つの地域がある。この二つはどこでつながったんでしょうか。

岩根 きっかけは「フクシマオンド」です。11年の夏に、マウイの人たちがお金を集めて、東日本大震災の被災者を約100人ハワイに招待しました。ボンダンスの会場に、双葉郡の中高生が30人くらい来ていて、最初は端っこのほうにいたんですけど、フクシマオンドの演奏が始まったら「この唄、知ってる」と踊りだした。100年以上前に福島から渡ってきた唄を聴いて、そのルーツからきた子たちが踊っている。でも、その子たちは故郷が被災してしまって、盆踊りができなくてここにいる。目の前の

その瞬間がすごく強烈でした。踊り終わったときに、10代の女の子がすごくうれしそうに「もう踊れないと思ってた。ここで聴くと思わなかった」と言っていて胸を打たれました。

——岩根さんと福島の縁はハワイからだったんですね。「ボンダンス/盆踊り」の写真が強い印象を残しますが、ハワイは赤く、福島は青い写真なのはなぜですか。

岩根 盆踊りを撮るなかで、何百年も連なってきた音だったり、その場のエネルギーみたいなものを写すにはどうしたらいいんだろうと考え続けました。目の前に起きていることだけをとらえた踊りのドキュメント写真では、私を感じていることが伝えられないと思ったんです。

カラーフィルターをつけて撮ったのは、「制作」を意識して滞在を始めた福島が先でした。三春町の盆踊りの練習場になっている神社の倉庫で、背景に暗幕を引かせてもらってライティングしたんですね。背景を

落として、さらに光量を落とすためにたまたま持っていた青いフィルターをストロボにつけて撮ってみて、これだ、と思いました。自分が感じていることが写っているように思えたんです。

——色がつくことで、目に見える現実とは少し違うものになりますね。情報がそぎ落とされることで、手の動き、身体に集中できる。ハワイは赤ですが、提灯ちよんの照り返しにも感じられるし、火山の赤い火とも呼応している。岩根さんにとって写真は、記録することと、表現することの両方があるんですね。最後に活動予定を教えてください。

岩根 パノラマカメラで帰還困難区域を撮っています。双葉をはじめとして大きく変わり始めているので、これからの変化も撮らなきゃいけない、と。『KIPUKA』は、今後海外でも展示したいので、古い情報を発信しないように、これからの変化も撮っていきます。移民の人たちが抱えるものへの興味も続いていて、それに関してはまた別のテーマでやりたいと思っています。





「『KIPUKA』に結集するまでの時間の経過と誠実な仕事ぶりは、彼女のもっている資質なのかもしれない」

—— 石内都

いしうちみよこ

1947年、群馬県桐生市生まれ。79年、写真集「APARTMENT」および写真展「アパート」で第4回木村伊兵衛写真賞受賞。2014年、ハッセルブラッド国際写真賞受賞。6月に奈良市写真美術館、9月にニューヨークのFergus McCaffreyギャラリー、11月にちひろ美術館・東京で個展を開催予定。

1年に1度、大量の写真、おもに写真集を集中的に見る経験は、いながらにして1年間の世界の出来事と写真を撮っている人たちの個人的な興味、実体験、実生活を目のあたりにする快感がある。なんと多種多様な写真があることか、なんと多くの人たちが写真とともに生きているのか。撮る人がいて、撮られる人がいる。この1年間で開催された写真展と出版された写真集は数えることができないほどの量である。その中から作品を選ばなければならないのが賞である。自選ではないので、誰かが選んだ作品を何度か確認しながらノミネート作が決まった。

写真集は一度見た感じと、二度三度見た感じがほとんど変わらない作品もあれば、見返すたびに变化していく作品もある。その印象は見るたびに深くなるものとそうでないものに振り分けられ、必然的に一つ二つと欠けていき、最後に6人の作品が残った。

ミヤギフトシ氏の東京都写真美術館「小さいながらもたしかなこと」のグループ展での作品は、写真と映像のせめぎ合う艶かしい表面が魅力的だった。川崎祐氏「Scenes」は身近の関係する人物と風景を撮りながら妙なユーモアがあり、しっかりした距離の測り方が好ましい。富安隼久氏の「TTP」は写真の定点観測を忠実に写し撮った捨てがたい作品である。露口啓二氏の「地名」は北海道のアイヌ語地名を基本とした取り組みは新しい視点と、今やつとアイヌ民族の歴史が一部修正されようとしている今日的なテーマとして貴重な記録となるだろう。しかし、写された風景写真からアイヌ語との関係が見えにくかったのが残念である。金川晋吾氏の父親を

被写体にした一連のシリーズは、現在の人間世界のひずみの表層のようだ。なぜかうまくいかない父の生き方を追うことで、肉親関係というドメスティックな世界から一歩踏み出し、「父/男」という生きざまのアヤシクアヤウイ感じがよく表れている。今まであまり写されてこなかった「父/男=働く」という存在を浮き彫りにしている作品である。

そして岩根愛氏の「KIPUKA」が受賞作となる。今回のノミネート作品の中で断トツに存在感があったこの作品は、彼女の満身の思いというようなものが見る者に伝わってくる。彼女が発見した福島とハ



ワイを結ぶ盆踊りの歴史、忘れられた移民の受難が福島原発事故と連動していた事実を目の前にして、「KIPUKA」に結集するまでの時間の経過と誠実な仕事ぶりは、彼女のもっている資質なのかもしれない。忘れられた歴史を具

体的なカタチとして写真に写すことの醍醐味を彼女は十分に体験したのだと思う。そして何よりも感心したのは、ハワイで見つけた1905年から49年まで生産されていた360度回転しながら撮影するフィルムカメラを修理して1人でかついで現場に行っていたこと。並々ならぬ写真への興味と愛情によって写された、時の風化の哀しい現実に一輪の花をそえるような美しい写真を評価します。



選考委員の

ことば

2018年に発表された多くの作品の中から、選考委員は何にひかれて

岩根愛さんを受賞者に選んだのか。

選考を終えた今、

その内実を語ってもらった。

撮影：掛祥葉子(写真部)



露口啓二「地名」
(赤々舎)から

今回ノミネートされた6人の作業には私自身が写真家として共感する点がそれぞれにありました。露口啓二さんはアイヌ語を起源とする地名を訪ね、かつてそこで感じられたものに耳を傾け、その場所に礼を尽くすように大型カメラでストレートに撮影しています。東京都写真美術館の「小さいながらもたしかなこと」展は世界的に同質の映像が経験されている現代にあって、国や性別といった枠組みはもはや無効であり、それらを超えたアイデンティティーのありようを5人の作家を通して浮かび上がらせるグループ展でしたが、同展でのミヤギフトシさんの展示は動画と静止画の関係において表現の可能性を拡張するものでした。富安隼久さんが当時住んでいた部屋の窓から見える公園を定点観測した写真集「TTP」は、卓球台に集まる人々や出来事が心地よい間合いで展開する秀逸な構成で、本としての姿も素晴らしいと感じました。川崎祐さんが自身の家族を撮影したフォトストーリー「Scenes」は、映画のコマ抜きのようにありながら写真固有の切断による緊張感を保っており、はじまりからエンディングに向けた盛り上がりの流れが自覚的に制作されてい

ました。金川晋吾さんは失踪を繰り返す父親を理解することができず、自身と父親のあいだにカメラを持ち込みました。ふつう写真は主体を持つ映像とみなされますが、機械であるカメラは誰のものでもない視点を手に入れることが可能です。この作品はそのことを示すとともに、理解できないことに対して言葉以外の方法で向き合おうとしています。

今回受賞となった岩根愛さんの作品は、盆唄を通してハワイと福島との土地をつなげる力作であり、テーマの社会的な重要性和作品としての完成度が選考会でも高く評価されました。私は審査にあたっては第三者的に批評することよりも、撮る人間としてその作業を理解できるか、共感できるかをとても大切に考えています。



Photo: Shinkai

「撮る人間としてその作業を理解できるか、共感できるかを大切に考えている」

鈴木理策



1963年、和歌山県新宮市生まれ。東京総合写真専門学校研究科修了。2000年、写真集「PILES OF TIME」で第25回木村伊兵衛写真賞を受賞。主な写真集に、「Water Mirror」「White」「SAKURA」「Étude」「海と山のあいだ」。06年から東京芸術大学美術学部先端芸術表現科教授。

すずきりさく



「ワンアイデアで短い時間で撮影したとしても、そこに至るまでの熱量と、発想の転換があればいい」

——— ホンマタカシ

ホンマタカシ

1962年、東京都生まれ。2011年から12年にかけて、個展「ニュー・ドキュメンタリー」を日本国内3カ所の美術館で開催。著書に「たのしい写真」、近年の作品集に「THE NARCISSISTIC CITY」(MACK)がある。また18年に「ホンマタカシの換骨奪胎一やってみてわかった!最新映像リテラシー入門」(新潮社)を刊行。

ここ数年、目立って近親者の高齢による認知症などの障害を扱った作品が増えている。写真というものは、社会の鏡なんだから、それは当然のこと。でも、それをただ撮るだけじゃダメなんじゃないんですか？

それに対する態度がなにかないと、という意見が出た。もっともです。



いや写真って、それを撮る、あるいは撮り続けるというのも形式としてあるんです。という受け答えもあった。そうなんです、この問題は僕も含めてもっとももっと考えていかなければならないと改めて思われました。

それに近親者なら自由に撮影して発表していいのか？という著作権とモラルの問題もあるだろう。いや、あえてそれを問うような作品こそ見たかった。近親者なんですよという、なんとなくのヒューマニズムに寄りかかっているように見えてしまうのは、少し残念だと思った。

僕は、木村伊兵衛写真賞という新人賞に当たる賞を、なにかものすごく頑張ったとか功労賞みたいなものにはいけないと考えている。いいじゃないですか、たとえワンアイデアで短い時間で撮影したとしても、そこに至るまでの熱量と、発想の転換があれば。それこそ芸術だと思うわけで。そういう意

味で、富安隼久さんとミヤギフトシさんを推したかったが、最後まで推し切るには、なにかが足りなかったように思う。決定的ななにかが。

岩根愛さんには、おめでとうと言いたい。福島と



ハワイの盆唄を追いながら、大判パノラマカメラを使うなどちゃんと写真的実験

もあって、第1次審査から圧倒的で、めずらしく本選でもそうそうに決まってしまった。時間をツブすのに苦労したぐらいでした。展覧会を楽しみにしています。



金川晋吾 [father]
(青幻舎)から



富安隼久 [TTP]
(MACK)から



1次選考ではさまざまな可能性が探られたが、最終選考では比較的早い段階で意見の一致が見られた。

受賞は逃したものの、私自身が最も好きな写真集は、富安隼久氏の『TTP』だった。独創的な作品で、洗練されたユーモアがあり、物語的な構成も相俟ってイマジネーションを刺激する。特筆すべき才能だと感じた。今後が強く期待される。

アイヌ語の地名を頼りに、見失われた土地の記憶を回復しようとする露口啓二氏は、重厚なコンセプトを着実に作品化し続けている。私はその仕事に敬服しているが、ストックすぎる編集が、審査会という競争的な場では突出した印象を残し難かった。

ミヤギトシ氏は、「日本の新進作家」展での展示《Sight Seeing / 感光》がノミネートされたが、氏の他の作品に比してもコンセプトが過渡期的に未整理だった。幾つかの詩的なイメージに心惹かれたが、方法と主題との必然性に弱さがあった。

さて、金川晋吾氏の「蒸発癖のある父親」を被写体とする作品だが、私は、作者に於いては自明な父との関係が、見る者に一向に開かれてこない点に甘さを感じた。

写真家にとって、身近な存在は作品化しやすいのかもしれないが、鑑賞者にとっては、結局、どうでもいい存在としてしか出発し得ない。これは小説でも写真でも同じである。この時、被写体と決してどうでもいい関係ではない写真家は、どのようにして鑑賞者を媒介してくれるのか。

作品に触れているうちに、鑑賞者が、そのどうでもいいはずの赤の他人に、何か自分自身にとってやんごとなき事柄を見だし得るかどうか、表現者としての最大の賭けであって、その困難は、量的に圧倒するような方法では乗り越えられないのではないか。

同様の問題は、川崎祐氏の作品にも感じられないわけではないが、こちらは写真自体が生活の全般に対してより語る場所が多かった。

社会的に老いの問題は、今後も大きなテーマだが、アプローチにはもう一工夫がほしい。写真は、介護施設などで、唐突に見知らぬ老人に話しかけられた時の衝撃をどう超え得るのか。また、この現実を提示されて、ではどうしたら良いのかという正直なフラストレーションへの態度も求められるだろう。私自身は、写真なんだから、それでいいんだという声で完結させないために敢えて呼ばれている審査員だと自覚している。

さて、圧倒的な支持により受賞したのは岩根愛氏である。私は、富安氏の作品に魅了されたものの、仕事としての重みと力強さ、達成された水準の高さから、選考の場では本作を第一に推した。

「フクシマ」という主題へのアプローチとして、「ボンダンス」を媒介にハワイと結ぶという着眼には目を瞠った。その多年に亘る継続的な撮影は、写真家の身体性をも緬い交ぜにしつつ、被写体の存在感を圧倒的に伝え、死者の存在を喚起する。

リアリズム一辺倒ではない幻視的な試みが主題とよく調和していて、一冊の本としての奥行きも広がった。素晴らしい作品が受賞したことを心から喜ぶたい。

Naoki Kawanishi

「作品に触れているうちに、鑑賞者にとってやんごとなき事柄を見だし得るかどうか、表現者としての最大の賭けだ」

——— 平野啓一郎

1975年、愛知県蒲郡市生まれ。京都大学法学部卒。99年、『日蝕』で第120回芥川賞を受賞。2008年から17年まで東川写真賞の審査員を務め、18年には木村伊兵衛写真賞の審査員に就任。小説作品に『葬送』『決壊』『ドーン』『空白を満たさない』『マチネの終わりに』など多数。三島由紀夫賞選考委員。

ひらの・けいいちろう



本誌編集長から 選考にあたって

この時代に評価されることの困難さ

第44回木村伊兵衛写真賞は岩根愛さんの「KIPUKA」に決定しました。

毎回、1次選考会と最終選考会の前に、推薦人に推挙していただきますが、岩根さんを推す数はその時点で最多でした。つまり、今回は「大本命」が受賞したことになります。

こう記すと、選考があっさり終わったと勘違いされそうですが、推薦から最終選考までの過程では、現代の写真表現をめぐる課題、在りようなどがさまざまに語られました。

たとえば、路上や子どもをテーマにしたスナップ作品。残念ながら推挙の時点で、ほとんど狙^めに載っていませんでした。これは本誌の特集でも取り上げてきましたが、肖像権に対する問題意識の広がり（誤解・曲解も含む）と無縁ではありません。自然や風景をテーマにした作品の推挙も数えるほどでした。

推挙された作品のなかで多かったのは、撮影者の身の回りをテーマにした「私写真」でした。もっとも、写真評論家の鳥原学さんが本誌2019年3月号「写真の平成30年史」で指摘しているように、「私写真」はともすると「自分探し」の域を出ないことも多いのですが、さすがに木村伊兵衛写真賞に推挙される

作品は出色のものが多かったと思います。

とりわけ目についたのは、身近な人物の老いや病、生をとらえた作品。高齢化社会はまさに今日的なトピックでもあるので、多くの人々に共感されやすいテーマです。だが、テーマが卑近なぶん、ストレートな撮影手法では作品の独自性を発揮することは難しい。カメラの機能に委ねているだけなら「作者の創造性はどこにあるのか」という話になります。そこで「言葉」を重ねることで表現を工夫しても、その言葉や指し示す出来事が強烈だと、写真と言葉の主従関係が逆転してしまい、写真賞として評価するのが困難になります。

いまや1秒間に25万枚の写真が撮影されていると言われています（※）。大した知識がなくてもデジタルカメラを使うだけでそれなりの画像が撮影でき、現像知識がなくても編集用のソフトやアプリの使い方を知っていれば画像はいかようにでも加工できます。交通網と通信網の発達で、かつては秘境だった異国の地でさえ「近場」になってしまいました。もはや「ただ撮る」だけでは不十分ですが、「プラスα」があっても必ずしも評価されるとは限らないのです。そんな困難な時代の写真表現とは何なのか。写真家たちに課された問いは難解です。しかし、そんな時代で最高の評価を受けるということは、とてつもない偉業だとも思うのです。

※ドイツ写真工業会(2014年)のデータによる。

佐々木広人

1971年、秋田県生まれ。2014年4月から本誌編集長を務め、今年3月末で退任。

第44回木村伊兵衛写真賞 ノミネート作家と作品

岩根 愛
写真集「KIPUKA」(青幻舎)
展示「FUKUSHIMA ONDO」(Kanzan Gallery)
金川晋吾
展示「長い間」(横浜市民ギャラリーあざみ野)
川崎 祐
展示「Scenes」(ガーディアン・ガーデン)

露口啓二
写真集「地名」(赤々舎)
富安隼久
写真集「TTP」(MACK)
ミヤギフトシ
展示「感光」(東京都写真美術館)
「小さいながらもたしかなこと」日本の新進作家 vol.15)